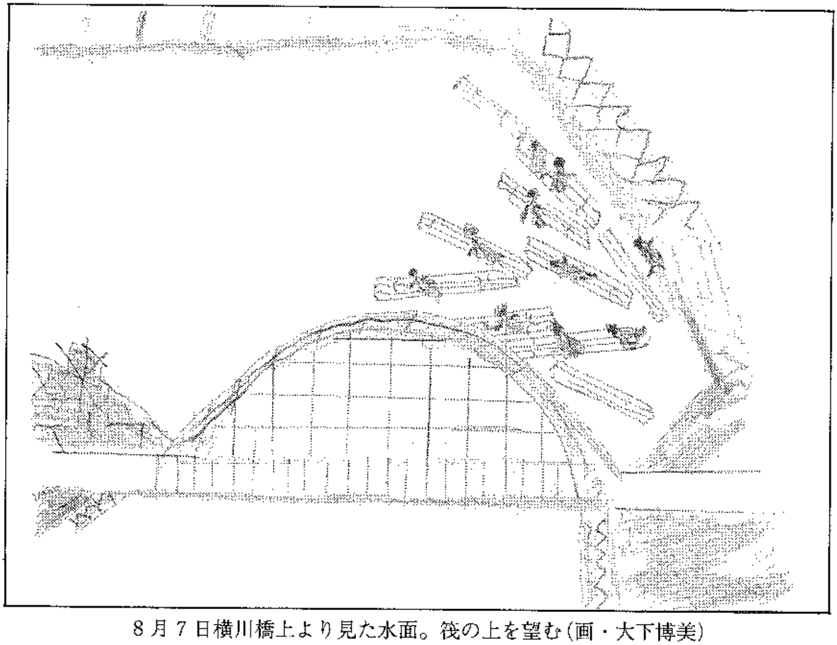
やすらぎ園

第二特別養護



8月7日横川橋上より見た水面。筏の上を望む（画・大下博美）

被爆前後の私の人生

高本アイ（九十二才）

私は広島市本川町（旧空鞘町）二〇八番地で染物屋を営む父高本信平、母ミネとの間に三女として生まれ、姉二人、弟三人の六人姉弟でした。私は高等小学校を卒業すると、二人の子供を亡くして淋しがっている京都の叔母の下に参りました。平安女学校に入学しましたが一年後腸チフスを患い入院しました。学校も退学しました。退学後花嫁修業に専念し、十八才の時建設業をしていた坂田愛暖と結婚し、楽しい生活に入りましたが、子供を授かることが出来ませんでした。趣味として日本画、聖楽の「ビワ」の道に入り穏かな生活が続きましたが、二十年後ある事情のため離婚しましたので広島に帰り、弟が経営している三篠高等和裁学校で手伝いをしておりました。その頃には両親は亡くなっていました。私が五十才の時大阪市東淀川区で合金工場を経営していた細本九一と再婚（入籍せず）、従業員七名ぐらいの小さな町工場でした。そのうち戦争が始まり、終末近くなった頃大阪にも毎日空襲が続き、とうとう工場も閉鎖になり強制疎開で主人は単身で現在の東広島市白市に行きました。その頃私は国防婦人会の役員をしていたので大阪に残っていました。

八月六日広島市に原爆が投下されたことを号外で知り、主人や姉弟の安否が気になりすぐ梅田駅に駆けつけましたが、切符は発売禁止になっていました。私のように広島に家族がいるので駆けつけた七人程の人と一緒になって駅員に掛け合い、やっとで貨車に乗せて貰うことが出来ました。広島に帰る貨車の中での十時間は大変長く感じました。朝五時頃広島に到着。もうもうと立ち込める黒い煙と瓦礫と化した駅のホームに降り立ち、ただ呆然とするばかりでまるで地獄絵を見るようでした。足の踏み場のない煙と瓦礫の中を本川町へ黙々と歩きました。途中で出会う人は皆髪は乱れ、衣服はぼろぼろで顔は墨を塗ったように真黒で、一瞬顔をそむけたくなりました。瓦礫の中ではすでに死んでいると思われる子供の側で母親らしき人が放心状態で、か細い声で「水を下さい」と言っていました。また親であろう死がいに幼い子が顔の表情も全く分らず、動くことも出来ず、声なき声で何かを言いたげな様子は全く悲惨なものでした。やっと見つけた家も跡かたもなく瓦礫になっていました。瓦礫の中で家族の消息を尋ね歩いたのですが全くわかりません。仕方なくその日は主人が疎開している西条町の白市へ行こうと己斐の山の近くに来た時、丁度白市へ帰る馬車に出会い乗せて貰いました。主人との再会を喜んだのも束の間、夜半から主人は嘔吐、下痢が激しく大変苦しみました。こんな片田舎では医者もおらず薬すらない時でしたので、「じゅうやく」や「よもぎ」などを煎じて飲ませました。幸いに一週間程で元気になりましたので、私は再び広

島へ行き、本川町の焼跡で弟の光信に会い抱きあって生きていたことを喜び会いました。弟は宇品の糧秣廠に勤めていたので助かったそうですが、家にいた家族は全員死んだとのことです。

生き残った近所の人と共同で焼けたトタンや木を集めて雨露がしのげるほどの堀立小屋を建て、共同生活を始めました。その後主人と大阪に戻り、工場跡の中に部屋をつくり生活を始め、仕事も元のように始めましたが、やっと経営の見通しがついた頃主人は急死しました。私は五十四才でした。一人になった私は再び広島に帰り、弟の屋敷の一角にアパートを建て、和裁を教えたり、家賃収入で一応落着いて暮しておりました。西観音町にいる姪寺田圭子の出産を手伝いに行ったまま一緒に暮すようになりました。昭和四十九年二月突然発作が起き、河村病院に八年間入院治療を受けました。五十七年六月河村先生のすすめでやすらぎ園に入所、寮母さんはじめ職員の皆さんには大変お世話になっています。戦前に姉と弟、戦後原爆症で二人の弟が死亡、二番目の姉は現在江波園に入所しています。

被爆後のくらし

内藤　ミサヲ（八十八才）

私は愛媛県喜多郡天神村平岡にて父永見五吉、母タメの長女として生れ他に五人の弟妹がいました。大正四年内藤芳太郎と結婚、男二人、女一人の母となり幸せな生活でした。長男義明が広島に就職したので私達一家も移りました。戦中は益々激しくなり二人の息子も次々と出征いたしました。物資も少なく配給制度になり、乏しい食糧を求めるのに精一杯のきびしい毎日でしたが、出征した二人の息子が戦地から帰って来る迄元気でいなければと、夫婦で励まし合いながら頑張りました。

私は近所の工場で働いていましたが、八月六日の原爆投下の朝は七時に自宅を出て職場に着き作業を始めた折、あのいまわしい「ピカドン」に合いました。工場のこわれた建物の下敷になり気を失った私を主人が見つけてくれました。一週間程意識が無かったそうです。私は頭の右側の生えぎわのところの骨が割れ、身体中にガラスの破片がささり、手のほどこしようが無かったそうです。当時は薬や包帯はなく、安方面の婦人会の方達が浴衣を引き裂いて包帯代りに使ってくれたそうです。また身動きのできない私を介抱もしてくれたそうです。

家を焼かれた私達はその後安町の知人宅に身を寄せましたが、建物疎開に動員された鶴見町で作業していた長女の消息が分りません。瓦れきの市内を毎日探しに参りましたがどうしても分りません。そのうち何処からか鶴見町で作業をしていた女子商の生徒はたしか安の正善寺に収容されたと聞き駆けつけました。娘は頭、右半身に火傷を受け土間に寝ていました。親娘の涙の再会でした。それから二人は三年余り、この被爆で負った傷のため随分苦しみました。

その内二人の息子も復員し、以前勤めていた国鉄に復職いたしました。お蔭で庚午町の国鉄の官舎に移り十年振りで親子全部が揃いました。主人は直接被爆していなかったのですが、娘を探しているうちに放射線を浴びたのでしょう、以後身体がだるく状態が悪くなったので仕事もできず毎日ぶらぶらしていましたが、昭和三十二年亡くなりました。私はたまには貧血がありましたが割と元気でしたが、昭和五十三年頃から腰が痛み出しました。佐伯郡五日市町の山下外科病院で約十か月入院治療しましたが良くならないので、同町の中村病院にかわり治療を受けました。おかげでぼつぼつ歩けるようになったところへ大野町役場の職員が来られ、原爆養護ホームは設備も良く、職員が良くお世話をしてくれるから入りなさいと勧めてくれました。私もその方が気が楽だと思ったのでお願いしました。昭和五十九年四月入所しました。寮母さんはじめ職員の方は親切で相談事も聞いて貰えます。同じように入って

来られた皆さんとも仲良く暮しております。

(なお、内藤ミサヲさんはこの原稿を書かれた直後、急性心不全で昭和六十年二月十日死亡されました。ご冥福をお祈りいたします。)

被爆後の私

川畑ユキヨ(八十四才)

広島市仁保町日宇那町で出生。父母兄弟と私の五人家族で暮していましたが、私が三才の時ハワイに渡り、兄弟も父を慕って渡米いたしました。それからは母と二人の生活になりました。私は美容師を志し美容学校に進みました。五か月後に卒業、神戸市の三の宮に行きいろいろ勉強して広島に帰りました。その後結婚して男女一人づつの母となりました。主人とは離婚し、子供を連れて実家に帰り、ささやかでありましたが母や子供達と平穏な生活を送っていました。突然母が倒れそのまま帰らぬ人になりました。七十二才を迎えようとした時でした。

八月六日朝、私は兵器廠の炊事場にいた時、ピカドンの恐ろしい衝激を体中で感じました。

とっさに外に飛び出し防空壕に向いましたが、すさまじい爆風のため立つことができません。四つ這いになってやっと入ることができました。その時空はまっくら闇の世界でした。ようやく明るくなりました。外に出てみると人の顔は眼だけ光り見るかげもない姿でした。子供のことが気になり家に帰りました。子供達は無事でしたので再び兵器廠に戻り、残務忙がしく働きました。

昭和二十一年六月から母の妹になる叔母と一緒に生活しましたが、叔母も間もなく原爆症で亡くなりました。その後宇品町に移り保養院に勤め始めました。ここは行き倒れの人や老人で一杯でした。食物の不自由な時で、あの頃のことを思うと今は夢のようです。あのいまわしい原爆投下から四十年という歳月が流れました。無情にも多くの生命と幸せを奪ってしまったのです。残った我々も苦難の道を歩み乗り越えて来ました。幸いにも私は生き永らえさせて頂き、いろいろと喜びの日を暮しています。

五十七年三月思いがけない事故に会いました。近所の店へ買物に行った帰りに自動車に飛ばされ右上肢を骨折、長い入院生活を送りました。現在やすらぎ園でねたきりの生活をしていますが、毎日少しづつ歩行練習をしております。これも寮母さんや職員の皆様のお蔭と感謝しています。皆々様のご恩と仏様のご慈悲を喜こび、一日一日を楽しく過ごさして戴きます。

ひとすじに　おろかにかえれ　法の道　己が力を　なにたのむらん
今日の日も　またつゆの命　ながらえて　御仏の声を　きくぞ嬉しき
仏より無上の宝　もらう身は　袋破れて　出づる念仏
夢の世に　名残り惜しんで　新幹線
重荷背負うて　仏まかせ　着いた所は　浄土駅

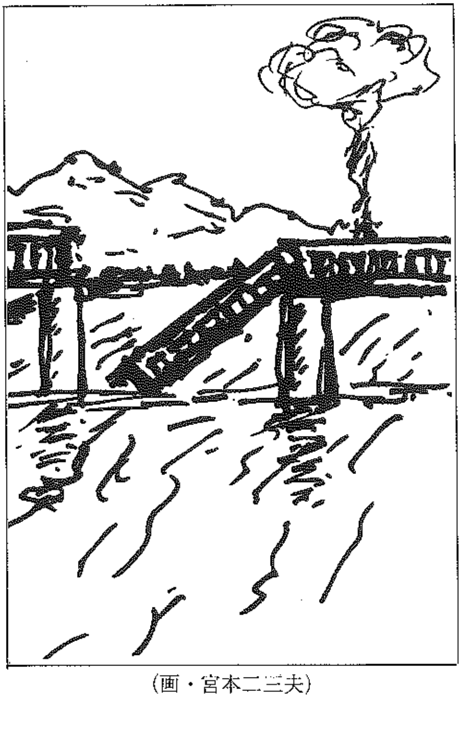
最愛の娘と夫を失って

松　本　ハ　ル　ミ（八十二才）

私は佐伯郡河内村字中郷で農業をしていた父竹本八百吉、母サミの末娘として生れました。
高等小学校を卒業すると、大阪・加古川の「カネボウ株式会社」の社長宅に三年間行儀見習

に上り、十九才で故里へ帰りました。すぐ結婚して女二人、男一人の母になりましたが、男の子は早く亡くなりました。上の娘は学校に勤め、下の娘は看護婦になり、袋町の島病院で働いていました。

昭和二十年八月六日の原爆投下の日、五日市町に家具を疎開させていたので私はそちらに行っていましたが、広島に何か大きな爆弾が落ちたと聞き、すぐ広島に引き返しました。当時家は東観音町にありましたが、家もなく死んだ人ばかり、今も当時のすさまじい有様が眼にうかびます。主人は宇品町合同缶詰会社にボイラーマンとして勤めていました。建物が崩



（画・宮本二三夫）

れ下敷になりましたが何とか抜け出し、丹那町へいったんは逃げたのですが東観音町の家に戻って来ました。幸いにたいしたこともなかったのが唯一の喜びでした。袋町の島病院に行って見ましたが跡かたもなく、看護婦をしていた娘の安否がわかりません。毎日五日市町から水筒、弁当を持って主人と一緒に、娘は何処かで生きているはずと一生懸命探しました。何といっても爆心地に近いので、もしや娘もと思うようになりました。私も疲労が重なり、めまいがたびたびあるようになり、外へ出るのが困難になりました。島病院の院長先生が瀬野川におられることを聞き尋ねて行きました。娘はやはりだめでした。形も残っていません。墓に入れるものがないので、どなたのでもいいから女の人の骨を下さいと泣いてお願いして貰いました。早速墓に入れお参りしました。長女は島根県の大田市で子供四人の母となって元気でいます。

主人の会社のご好意で宇品町に家を用意して貰い、五日市町から引き揚げました。しばらくは平穏な日々でしたが、昭和四十三年脳軟症になりましたので私も務めをやめ看護しました。その後、入退院を繰り返し、七年六か月目になくなりました。眼も見えなくなり、足も立てませんでした。原爆で最愛の夫と娘を亡くしました。

投下後四十年たちましたが、原爆が無かったら今ごろはと思うこともあります。私も一人になり高血圧で原爆病院に入院しました。入院治療でやっと快方になり退院、しばらく基町

の市営住宅で暮していましたが、老人の一人暮しは無理と言われ、市役所のお世話でやすらぎ園に入りました。寮母さんや他の職員の方に親切にして貰いありがたいことです。今は散歩などして健康に注意しています。娘と孫が面会に来てくれるのを楽しみに生きています。

被爆後の苦しい生活

村井ハルコ（七十八才）

被 爆 地…東白島町広電白島終点
当時の急性症状…なし
家族の死亡…なし
現　　症…胸部打撲神経症・慢性胃腸炎。

広島市竹屋町九十七番地で八百屋を営む父村井文吉、母ワサの二女として、明治三十九年五月三十日生れました。大正八年広島女子商業学校を卒業、広島郵便局に電話交換手として就職しました。大正十三年、大手塗料会社に勤めている和田嘉一と結婚、二人の子供をもう

け、ささやかな幸せの中で生活を楽しんでいました。
この幸せも昭和二十年八月六日広島市に投下された原子爆弾であとかたもなく吹きとんでしまいました。ちょうどその時、出勤のため白島電停で電車を待っていました。何かわかりませんが青い火、赤い火のようなものが「ピカッ」とひかり、私は持っていた日傘を放りだし地面に伏しました。背中に熱いものを感じましたが、しばらくして家に向って歩きました。家のあった一帯は火の海で家族や近所の人は誰もいません。大芝公園に避難すると家族や皆さんも一緒に逃げて来ていました。その日は野宿しました。一週間ほど戸坂の親類にお世話になり白島へ帰りました。
翌日からみんなで焼け残ったトタン、木など集め、かまぼこ小屋を建てて暮し始めました。私も家政婦になり、主人も会社へ出るようになりました。元気だった主人は三十四才の時交通事故で亡くなり、長男は事故死、長女は病死と相つぐ不幸にあい、一時は自殺も考えた程でした。一人になった私はまた家政婦で働いていましたが、ある日市役所の方から老人の一人暮しは危険が多いから老人ホームに入りなさいと言われました。色々考えた末、可部町にある「コーポナバラ」に入り、一年後やすらぎ園に入れて貰いました。
やすらぎ園に入ってからは職員の方々によく面倒を見て貰い、本当に安心して暮せます。主人、子供の命日には佐伯郡大野町の姪が墓参りに連れて行ってくれます。

『紙碑・被爆老人のあかし』取材者一覧

昭和60・3・31

所長　志水清
副所長　伊藤正八

【総務課】

総務課長　久留島通康
主任　国山征三
〃　中田慎治
主任主事　三浦初音
主事　三浦緑
〃　安藤一昭
〃　鱸直喜
栄養士　松田和子
〃　茂久田かをり
用務員　佐々木清
〃　栗田勝登
調理員　市地美寿枝
〃　木本美智子
〃　小椿映子
調理員　白木メグミ
〃　伊藤悠子
〃　恵南美智子
〃　児玉八重子
〃　平谷久美子
〃　冨山佳子
〃　加藤冨士子
〃　末盛カチエ

【医療課】

主任看護婦　小橋千恵
〃　中田孝子
看護婦　小谷妙子
〃　安部江代
〃　小田きよ子
〃　高橋チエ子
〃　桑原和子
〃　須賀信子
看護婦　浜野幸枝

【一般養護課】

一般養護課長　増田求
主任指導員　岩繁宮雄
専門指導員　渡部美智子
主任寮母　中本香都巳
寮母　上田幸子
〃　空河内八重子
〃　高田美代子
〃　猫西朝子
〃　藤野マサコ
〃　木村智恵子
〃　金川ミヨ
〃　田中里江
〃　新居照代
〃　金川昇子
〃　中島幸子

寮　母	岡田　八重子

【第一特別養護課】

第一特別養護課長	田村　博文
主任指導員	小西　豊
主任寮母	荒木　サダコ
寮　母	萩原　カズ子
〃	前田　佳代
〃	松本　須磨子
〃	上加　久枝
〃	山本　房代
〃	細馬　和子
〃	新田　一子
〃	川崎　哲子
〃	畠山　トミ子
〃	重森　まさみ
〃	濱野　道恵
〃	沖　ユリコ
〃	森　美智子
〃	有海　啓子
寮　母	石富　陽子
〃	片山　光子
〃	兼山　里子
〃	末森　真理子
〃	河野　信子
〃	弘本　和子
〃	藤田　興子
〃	鈴木　敏子
〃	横下　チズミ

【第二特別養護課】

第二特別養護課長	坂本　照雄
主任指導員	正月谷　啓一郎
主任寮母	中平　喜代子
寮　母	酒井　コズエ
〃	千葉　三重子
〃	沢田　チサ
〃	竹延　富江
〃	福嶋　清子
〃	近藤　アサ子
寮　母	高橋　道子
〃	佐々木　チヨ子
〃	森岡　君子
〃	大同　美智子
〃	岩本　美鈴
〃	猶木　忍
〃	伊藤　久子
〃	上野　京子
〃	坪田　俊子
〃	太田　文子
〃	山本　紀久枝
〃	竹下　奈津子
〃	山下　元子
〃	嶋谷　洋美
〃	平賀　千富
〃	中井田　鶴子
〃	南野　ヨシミ

紙碑・被爆老人のあかし　第二集

昭和六十年　五月二十日　印刷
昭和六十年　五月二十五日　発行

編集兼発行者　財団法人　広島原爆被爆者援護事業団
広島市中区舟入幸町十四番十一号

西日本印刷株式会社
広島市安佐南区長束一丁目一番十八号